

須磨家旧蔵の木造菩薩坐像と像内納入品

浅 湫 毅

はじめに

京都国立博物館では、戦前に中国大使として活躍された須磨弥吉郎氏の旧蔵品を、ご子息夫妻の末千秋氏および良子夫人よりご寄贈いただいた^①。そのコレクションの大部分を占めるのは、氏が中国在任中に彼の地の文人たちとの交流の結果として収蔵されることとなった近代の中国書画である。二十一世紀の今日にして思えばきわめて貴重なコレクションといえるが、当時それらはまさに現代美術であり、氏の先見の明あつてのものと実感する。そのうち当館へは二千件をこえる書画が寄贈され、その一部はこれまでも何度か展示されたのでご存知の方も多いだろう。

これら書画のコレクションに対して数こそ少ないものの、絵画と同様の熱意をもって須磨氏が精力的に収集されたのが、中国古代の仏教彫刻である。その中から厳選された二十余件が、平成十二年と同二十一年の二度にわたって寄贈された。これら二十余件の寄贈作品全点に関しても、図像的、歴史的に興味深い作品が多数含まれ

ているので、いずれ機会をあらためて紹介したいと考えているが、本稿では近年修理をおこなった木造の菩薩坐像(図13)の修理の概要と、修理の際に胎内より発見された納入品(図14)について、ひとまず報告をおこないたい。また、本体の修理に際しては、胎内に大量に落ちていた木屑を試料として木質分析もおこなったので、その結果もあわせて報告することとする。

一、菩薩坐像の概要

それでは最初に本像の概要について、像容、品質構造、法量、製作年代の順で述べていこう。

〔像容〕

本像は木造の菩薩形坐像(挿図1)である。^②

細部をまず上部から順にみていくと、頭頂には大ぶりの螺髻を結い、その頂上に火炎宝珠をいたたく。天冠台(上下の縁に小さな連珠文、その間に大きめの珠を間隔をあけてめぐらす)を著し、髻と天冠台より下方の髪束には毛筋を丁寧^③に刻み、天冠台より上の地髪



插图 1-2 菩薩坐像 全身背面



插图 1-1 菩薩坐像 全身正面



插图 1-5 菩薩坐像 頭部左側面



插图 1-4 菩薩坐像 頭部正面



挿図 1-3 菩薩坐像 全身右側面

部は素文とする。後頭部では、髪之最下部（うなじ部分）に注目すると、実際に髪を梳き上げたときに弛む様をやや膨らみを持たせて刻むことで写実的に表現している。表情を含めた頭部周辺の表現においてはおくのごとく、全面的に写実表現への指向が感じられる。額には現状で径の大きな窪みをあらわしている、かつては大きな別製の白毫が嵌められていたものとみられる。眉は細めだが明瞭に鑄をあらわし、その下に切れ長な眼を刻む³。鼻および口は小振りだが、耳は大きく耳殻がやや前面に向くように刻まれる。耳朶は環状で貫通する。

上半身は両肩を天衣が被うが、条帛はあらわさない。そのかわりに華やかで複雑な装身具で飾られている。胸飾は、基本形は天冠台と同様に細かな連珠の間に大きな珠を配するものだが、そこから二

重の連珠装飾（瓔珞）が胸の上と腹部下へ二条垂下する。臂釧は下方の肘付け根部分に主帯（やはり細かな連珠と大きな珠から構成される）をあらわし、正面側に大きな山型の装飾をもつ。腕釧も細かな連珠と大きな珠からなる。左手は屈臂して、腹前で仰掌して手首をやや上方に曲げ、第一、二指で小さな宝珠様の持物をつまむ。右手も屈臂するが残念ながら手首先を欠失している。ただし前膊の角度と長さからみて、左手の下まで伸びていたものと想像される。

下半身には裳をまとい、右脚を上結跏趺坐する。両足とも足裏をあらわにするが、興味深いのはその側面をめぐって、連珠装飾をあたかもサンダルの鼻緒であるかのようにあらわす点である。背面では腰帯状に小さな連珠と珠からなる装飾をあらわし、そこから瓔珞が複数垂下する。

全身は胸が大きく張る一方で、腹部は細めにあらわされ、側面からみると上体を後方に反らせる。このような肉身部の表現や、華やかな装身具などは、チベット仏教の尊像によくみられるもので、本像の性格や製作された時代背景をあらわすものと考えられる⁴。

「品質構造」

本像は広葉樹かとみられる材より彫出された木像で、基本的には一木造りである。頭体は一材から彫出され、とくに割り放たれてはいないようである。両肩部分の矧目は彩色のため現状では確認できず、後述のとおりX線透過撮影でも確認できなかった。体部と共木の可能性が高い。眼の部分は若干の彫り直しがあるかとみられるが、造像当初より彫眼で、異材を嵌入した痕跡は確認できない。体部は左胸部分と背面にそれぞれ一材ずつ、蓋状に板材が嵌められている。その内部には内刳が施されている。左右の腕はそれぞれ

れ前膊（肘部分）で別材を矧ぎ、左手首先もまた別材からなる。腰部分は左右とも三角形の材を矧ぐ。脚部は一材から彫出され、蟻柄によって本体と接合する⁵⁾。像底には円形の板が蓋状に嵌められている。以上はすべて木製とみられるが、天冠台や胸飾、瓔珞、臂釧、腕釧などの装身具類は、いずれも練り物で作られているようである。現状、面部や裳の部分に彩色が残るが、造像当初のものとは考えがたい。

〔法量〕（単位はセンチメートル）

像 高	五九・七	髮際高	四四・八
頭頂顎	二三・三	面 長	九・七
耳 張	一三・五	面 幅	一〇・〇
肘 張	三二・五	膝 張	四〇・三
面 奥	一一・〇	胸 奥	一三・九（中央）
腹 奥	一二・七	坐 奥	二六・二

〔製作年代〕

像容の項でも触れたように、厚みのある胸部に対し細く絞られた腰という特徴ある肉取りや、煩瑣ともいえる胸飾や瓔珞などの装身具に代表されるエキゾチックな作風は、チベットにおいて製作された仏像と共通する点が多い。一方で、穏やかで小振りな面部の表現などは、チベットの仏像より中国の仏像と近い特徴をもっている。これらの要素から判断すると、本像はチベット仏教の影響下で、中国において造像されたものと考えるのが妥当であろう。

管見のおよぶ限り、中国における同様の作例で年代判定の基準となる紀年銘を有する作品は寡聞にして知らない。しかしながら、諸書で元時代から明時代にかけての作例とされる石窟寺院安置像や単

独像のうちに、本像と同様の特徴を有する作例が散見される。本像のやや角張った脚部の表現や、裳の衣文線なども、この時代の特徴を示している。また、丁寧な毛筋彫をはじめとする写真表現への指向がみられる頭部の表現などは、わが国の鎌倉から南北朝時代にかけての彫刻、特に慶派（七条仏師）のそれを思わせるところがある。朝鮮半島においても高麗時代・十四世紀の作例には比較的近い像容のものがある。したがって、それらと同様の特徴をもつ本像も元時代後期から明時代初期、十四世紀から十五世紀にかけての作例と考えるのが妥当であろう。

なお、尊名に関しては、頭部にそれを識別しうる標幟がなく、残念なことに右手首先も現状では失われているために断言できない。左手の指先で小さな珠をつまむというのは特徴的だが、同様の例を探し得ない。今後の課題としたい。

二、修理の概要

1、本体の修理

本体の修理は平成二十二年度におこなった。担当した工房は株式会社京都科学である。事前に同社によって、本体のX線透過撮影がおこなわれた。これは、胸飾、瓔珞等の装身具が練物等で造られているように見受けられ、また像の構造も一部不明確であったため、細部の修理の方針を確定するために必要となったからでもあるが、背面中央に背板状に材が嵌められており、納入品がある可能性もあったので、それを事前に確認するためでもあった。

そのX線透過撮影（挿図2）によってわかったことは以下のとおり



挿図2 正面からのX線透過画像

である。

- ① 頭部天冠台には金属製の釘が六本残っている。
- ② 頭部には内割りがない。
- ③ 肩に矧目は見受けられない。
- ④ 胎内への納入品は確認できない。⁽⁶⁾
- ⑤ 体幹部への内割りは胸上部から腹部下部までであり、胸部部分の径が最も大きく楕円状に割ってある。
- ⑥ 像底の円形部材は、円形の薄い板状の部材が嵌め込まれるが、内割り部分には接していない可能性がある。
- ⑦ 瓔珞はX線の透過度合いから、無機物を多く含むと思われる。

事前に立てていた基本的な修理方針に加え、以上の所見をもとにした細部の修理方法についてあらためて検討をおこなった。その方針にもとづいておこなった本体修理はつぎのとおりある。以下京都科学より提供を受けた修理報告書にもとづく。

〔損傷状態〕

- ① 像全体に汚れが付着し、後補の彩色が施されている
- ② 矧ぎ目全体がゆるんでいる。特に右腕前膊、左手首先、腰部左右の三角材、脚部の接合部分ではそれが顕著で、左手首は脱落していた。
- ③ 随所に虫蝕があり、細かな孔が多数みられる
- ④ 右手首先が欠失し、台座（蓮華座）は欠失部分が多く部材が揃っていない

〔修理概要〕

上記の損傷状況に対して、以下のとおりの修理をおこなった。

- ① 全面的にクリーニングをおこない、埃や汚れを除去した。特に面部左側は後補の充填材自体が汚れとなっており、慎重に可能な限り取り除いた。像正面の胸から大腿部にかけては、過度のクリーニングによって印象が損なわれることを避けるため、程度をはかりながらおこなった。
- ② 背板、左前膊、左右上膊から肘外側にかけての薄材、脚部材など、緩みがはなはだしい箇所は部分的に解体をおこない、再接合をおこなって補強した。矧目の隙間は木尿漆を用いて埋め、外観を損ねないように整えた。ただし胸部については瓔珞が矧ぎ目にかかっているため解体はおこなわず、表面からの処置にとどめた。左手首の取り付け角度に関しては、前

膊部分の面との連続性を考慮して取り付けた。
なお、背面の板材を外した際に、内部より紙束を五巻と二塊にまとめた納入品が発見された(挿図3)。木製の軸などに巻かれず紙だけであったためX線透過撮影時にも気付かれなかったものと思われる。同時に内部より大量の木屑が出てきたので、後述のようにこれをもとに樹種の分析をおこなった。

③ 虫蝕孔により木質部分が劣化しているため、アクリル系合成樹脂(パラロイドB-72)を塗布・含浸し、材質自体の強化をおこなった。

④ 欠失した部分は新補はおこなわなかった。また台座部分も強度の点などを考慮して、当初部分の再現は断念し、方座を新造した。

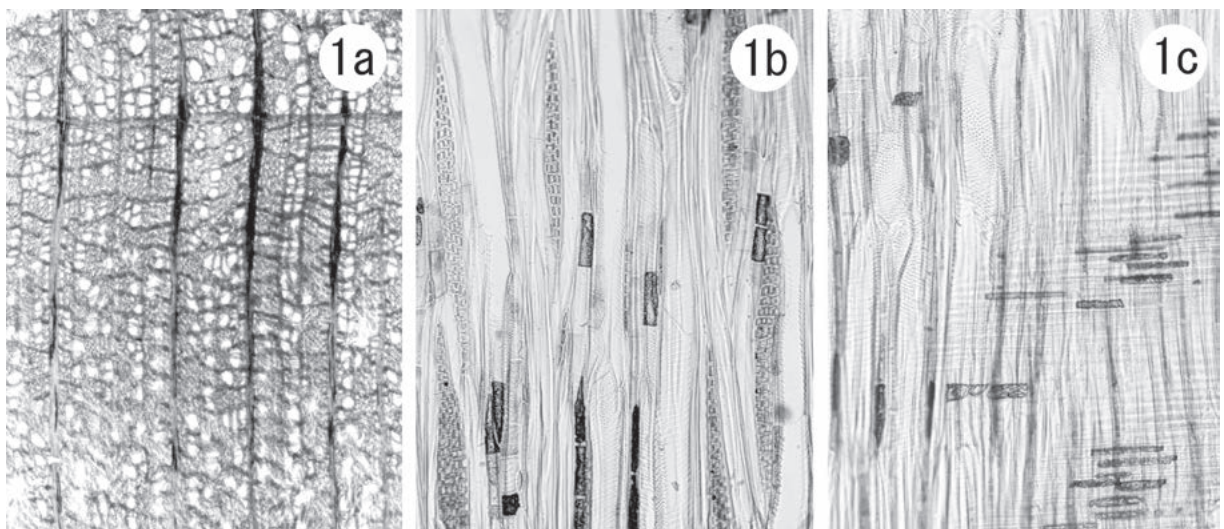
2、木材の分析結果

木材の分析は、背板を外した際に発見された大量の木屑をもとにおこなった。分析は本体修理をおこなった京都科学を通じて、岐阜県に本社を置く株式会社パレオ・ラボに依頼した。分析方法は以下のとおりである。

剃刀を用いて試料の三断面(横断面・接線断面・放射断面)から切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製のうち、光学顕微鏡で観察・同定し、写真撮影をおこなった(挿図4)。挿図のうち1aは横断面(スケール \parallel 五〇〇 μ m)、1bは接線断面(スケール \parallel 二〇〇 μ m)、1cは放射断面(スケール \parallel 二〇〇 μ m)である。



挿図3 背面の板を外したところ



挿図4 木材の光学顕微鏡写真

その結果、広葉樹のシナノキ属であることがわかった。以下は同社より頂戴した報告書からの引用である。

シナノキ属 *Tilia* シナノキ科

やや小型の道管が単独もしくは放射方向に数個複合して散在する散孔材である。道管の穿孔は単一で、道管全体にらせん肥厚が明瞭にみられる。軸方向柔組織は線状となる。放射組織は同性で、一々五列幅となる。

シナノキ属は温帯に分布する落葉高木で、日本にはシナノキ・オオバボダイジュ・ヘラノキ・マンシユウボダイジュ・ボダイジュの五種が生育する。シナノキは北海道から九州の温帯に広く分布するが、オオバボダイジュは北海道から本州中部・北部の温帯上部、ヘラノキは本州西部・四国・九州、マンシユウボダイジュは朝鮮から中国に多く日本では山口県のみに生育し、ボダイジュは中国原産で日本では持ち込まれたものが一部野生化している程度である。

代表的なシナノキの材は、軽軟で切削加工が容易である。また緻密で狂いが少ないが、耐朽性はやや低い。大木になり材質も欠点が少ないことから、現代では器具材・家具材・彫刻材などに用いられる他、合板としてよく利用される。(引用終了)

以上の分析結果と像の製作地から考えて、本像には中国産のシナノキが用いられていると推定できる。それ以上の詳しい樹種までは細胞の分析からでは断定できなかったが、上記の報告にもあるように、シナノキにはボダイジュ(中国ボダイジュ)が含まれており、

おそらく本像には中国ボダイジュが用いられているのであろうと想像する。

インドにおいてボダイジュは釈尊がその樹下で悟りを得たことでよく知られている。中国のボダイジュはインドのボダイジュとは樹種がまったく異なるのだが、両者とも葉が心葉形である点では共通しており、そのことから中国のものもボダイジュといわれるようになったらしい。とはいえ当時の中国においては、釈尊ゆかりのボダイジュと同種と思われるに違いなく、その木より取った材を造像に用いるということは意図的におこなわれたもので、発願者なしは造像者はそのことを当然強く意識していたものと思われる。

3、修理時に発見された納入品

上記のごとく修理の際に像内から、版本を五巻および二塊にまとめたものが発見された。像内への納入状況は巻物五巻がそれぞれ包紙にくるまれた状態で上下二段に納められ、上段には右、中央、左に三巻が並び、下段には二巻が左右に並んでいた。塊状のものは隙間を埋めるように、巻物の上方と背面側につめられていた。一紙の寸法はおおむね共通しており、縦が約十一センチ、横が約七十五センチほどであった。これらを丁寧に取り出した上で、本体修理の翌年に株式会社藤岡光影堂に依頼して修理をおこなった。以下は同社から提供を受けた報告書にもとづく。

「損傷状態と修理方針」

本紙は版本で、巻状のものが五点と塊の状態のものが二点あり、現時点では巻状のうちの一点と塊状のうちの一点が応急的に平置き

となつてゐる。⁽⁷⁾

汚れを多く抱え、特に塊状のものについては開閉もままならぬ状態であるため、料紙を伸ばし、汚れを除去し、危険な箇所には補修を施し、保存上必要であれば裏打を施す方針とする。

上記処置後は、平置きで一セットずつ畳紙で挟み、ラベルを貼付し、計七セットを中性箱に保存する。

〔修理後の状況〕

品質・形状及び寸法

版本 七卷（平置きにて保存）

本紙寸法 縦 一〇・二〇一・九センチ

横 七一・七〇七九・八センチ

使用材料

本紙補修紙 楮紙（高知・尾崎製）

竹紙（丹波・三宅製）

畳紙 楮紙（五箇・宮本製）

保存箱 中性紙（株式会社資料保存器材製）

〔修理工程〕

①調査

修理前写真撮影・修理前状態調査をおこない、損傷等の記録をおこなつた。

高知県立紙産業技術センターに依頼し、本紙料紙繊維組成検査をおこなつた。

各セット本紙料紙一紙の調査をおこなつた。

墨層について、拡大顕微鏡による調査及び固着力確認調査をおこなつた。さらにパッチテストを行い、修理に耐えうる固

着力を確認した。

②本紙の安定化

特に二塊の本紙を安全に広げ、本紙を平らな状態にした。

③汚れの除去

墨層等の固着力及び汚れの移動等を十分に確認した上で、浄化水を本紙表面から噴霧し、水の移動によって動く最低限の汚れのみ本紙下に敷いた吸取紙へ移動させた。

④補修紙作製

本紙料紙の繊維組成検査結果を踏まえ補修紙を選択した。

⑤本紙欠失箇所の補修

選定した補修紙にて、欠失箇所に補修を施した。補修は、保存上危険な箇所にのみ施し、補修紙は可能な限り重なりを削る方針とした。

⑥本紙の補強

本紙が薄くなつている箇所などについては、状況により補修を施した。

〔料紙の分析〕

高知県立紙産業技術センターに依頼し、本紙料紙繊維組成検査をおこなつた結果、四卷二塊はこうぞ繊維（楮紙）で「上段右」一巻のみ、たけ繊維（竹紙）であるとの結果を得た。

以上の修理の結果、五卷二塊はそれぞれ以下の枚数からなつてゐることがわかつた。

最上段（塊） 包紙なし 八枚

上段右側（卷子） 包紙あり 一三枚

同 中央(卷子) 包紙あり 二三枚
 同 左側(卷子) 包紙あり 一二枚
 下段右側(卷子) 包紙あり 二〇枚
 同 左側(卷子) 包紙あり 一七枚
 背面側(塊) 包紙なし 一二枚

なお、これらは横長状の各本紙料紙の裁断端口の形状・糸目・繊維の流れなどから、原紙を上下に二つ折りしたものを数枚重ねフリーハンドで裁断した可能性が考えられるという⁽⁸⁾。

さて、これら九五紙と包紙五枚からなる納入品は、そのいずれにも残念ながら年代を判定する書き込みなどはなく、造像当初のものか後世の追納かは判然としない。しかし、版本の種類としては三種に分けられることが判明した(図14)。二種がインドの文字であるデーヴァナーガリーで記され、一種がチベット文字で記されているようである。浅学にしてこれらの文字が何を意味するのかは判読できないが⁽⁹⁾、興味深いのはそれらの文字とともにいずれも漢字による下記のような記載がある(文字は新字体に直した)。

「デーヴァナーガリーの版本1」

卷末

「一護万神経呪」(挿図5)

「デーヴァナーガリーの版本2」

卷末

「三宝吉祥贊」(挿図6)

「チベット文字の版本」

巻頭

「仏座 菩薩座 塔座 内装用」(挿図7)
 卷末

「馬哈葛辣根本 馬哈葛立心呪

八馬天王真言 四臂馬哈葛辣

咎巴辣真言 永財母真言」(挿図8)

「下段左側包紙」

題箋

「五仏四衆真言等経呪」(挿図9)

これらの文字のなかで、特に興味深いのはチベット文字の版本にある「仏座 菩薩座 塔座 内装用」という一行であろう。内装用というからには造像や塔の建立にあたって、何らかの部分の内装用に用いられていたということである。そのように考えれば、フリーハンドで裁断されていることにも納得がいく。また、像内には莊嚴を終えて余ったものを納入したものかもしれない。その他のことでは、同巻末にある馬哈葛辣はマハーカーラ、すなわち大黒天のことであろう。八馬はもしかしたらヤマー、すなわち焰摩天のことかとも想像されるがよくわからない。その他、デーヴァナーガリーの版本に記された漢字による記載も、その意味するところは判然としない。管見の限り類例もしらないので、ご存じの方があればぜひともご教示を賜りたい。

おわりに

以上、須磨家よりご寄贈いただいた菩薩坐像について、本体の修

理とその修理時に発見された納入品を中心に報告してきた。筆者の能力がおよぶ範囲では若干の考察を加えたが、本体の製作年代、納入品の納入時期およびその意味するところなど、ほとんどが不明のまま残った。筆者の浅学を恥じるとともに、ぜひとも諸賢よりご教示、ご訂正を賜りたいと願って本稿を終えることとする。

〈註〉

- 1 須磨弥吉郎氏（一八九二～一九七〇）の経歴およびコレクションの経緯については次の文献を参照いただきたい。
呉 孟晋「中国絵画の近代化と日本―筆墨と美術のあいだで」『中国近代絵画と日本』（京都国立博物館 二〇一二年）
- 2 とくに銘文があるわけではなく尊名を判断しうる標幟もないので、もちろん菩薩以外の可能性もないわけではないが、ここでは寄贈時の名称である菩薩坐像として表記する。
- 3 眼の輪郭部分は、後世に若干彫り直されている可能性がある。
- 4 曾布川寛氏によると、チベット僧パクパ（一二三五～八〇）は、一五八八年にフビライによる道仏論争において仏教側の代表として道教に勝利し、フビライが元王朝を建てるとともに元の国師となり、以後中国各地にチベット様式の寺院、仏塔、仏像などが造られるようになったという。
- 5 曾布川寛「仏教の聖地チベットの歴史と芸術」『聖地チベット ポタラ宮と天空の至宝』（九州国立博物館・朝日新聞社ほか 二〇〇九年）
修理前は接合がゆるみ脚部を取り外すこともできたが、今回の修理にあたって像の強度と運搬時の安全を考慮して、本体と脚部はしっかりと接合したため現状では柄は見るべきでない。
- 6 X線撮影時は構造および装身具の素材を判断する必要があったので、比較的強いX線を照射したため、紙でできている納入品は明瞭に写らなかった。解体時に納入品が発見されてあらためて確認したところ、その意識でみるとうっすらと何らかの影が腹部に確認できる。
- 7 本体の修理を担当した京都科学により全納入品が取り出され、状況確

- 8 認のためひとまず巻物と塊を一つずつ仮に開いた。
修理を担当した藤岡光影堂からのご教示による。
- 9 いずれそれぞれの言語、文字を専門とする方々に判読していただく予定である。

〈謝辞〉

本像をご寄贈たまわった須磨末千秋・良子ご夫妻に厚く御礼申し上げます。また、本像の修理、材質分析に携わり、情報を提供していただいた、株式会社京都科学、株式会社パレオ・ラボ、株式会社藤岡光影堂、高知県立紙産業技術センターの皆様には感謝いたします。